虐待被害を疑った時の子どもからの聴き取り

養護教諭志望学生を対象とした意識調査から

○田中 晶子

(四天王寺大学 人文社会学部)

キーワード：司法面接・児童虐待・多機関連携

The interview of the children when suspected of abuse.

Akiko TANAKA

(Shitennoji University)

Key Words: investigative interview, child abuse, multidisciplinary Team

目 的

司法面接 (investigative/forensic interview) は、虐待等の被害にあった(疑いのある)子供に対し、最小限の面接回数で、誘導することなく子どもから体験を聴き取り、二次被害等の精神的ダメージを軽減することを目的として開発されたもので、児童相談所や警察・検察等において広く取り入れられている。

一方で、児童相談所や警察・検察での事実確認の前段階にあたる、上記機関への通告義務を持つ機関(教育機関や医療機関等)や保護者が、子どもに対しどのような聴き取りをしたかによって、その後の子どもからの事実確認が困難になることがある。本調査は、児童相談所等への通告義務を持つ教育機関において、特に児童の虐待事案に対応する可能性の高い養護教諭を志望する大学生を対象に、子どもからの聴き取り(事実確認)について意識調査を実施した。さらに、子どもから体験を聴くことに関する講演を聞いた後の意識調査と比較することにより、教育効果についても検討を試みた。

方 法

参加者：大阪府内私立大学の養護教諭養成課程に在籍する女子大学生 34 名(平均年齢 19.94 歳)が調査に参加した。
調査用紙：【事前調査:pre】保健室へ入室した子どもが「パパがたたいた」と言った場合を想定し、大人が子どもから情報収集すべき事柄(15 項目)、大人から子どもへ伝達すべき事柄(12 項目)についてそれぞれどの程度重要と思うか 4 件法で評定を求めた。上記項目については、仲(2014)で用いられた項目を使用した。さらに、学校内で虐待の疑いがある児童に出会ったときの対応(9 項目)についての考えと児童虐待への関心度について 4 件法での評定を求めた。【事後調査:post】事前調査と同じ項目に再度評定を求めた。最後に講義を受けた感想や意見を自由記述で回答を求めた。
手続き：事前調査として調査用紙に回答を求めた。その後、子どもから体験を聴くことについての講義を行った(1 時間程度)。講義後に事後調査として調査用紙に回答を求めた。

結 果

収集すべき情報：各項目の評定値について、事前/事後×項目の 2 要因 ANOVA を行ったところ、交互作用が有意であり($p < .01$)、パパの意図、日常的にたたかれること、子どもの気持ち、パパに対する子どもの気持ち、家族情報、衣食住に関するニーズの項目に有意差が示され、講義後に重要度の評定が下がった。

伝達すべき情報：各項目の評定値について、事前/事後×項目の 2 要因 ANOVA を行ったところ、交互作用が有意であり($p < .01$)、わからないと言うことは講義後に重要度評定が上

り、あなたは悪くない、受容や共感、パパへの評価と対応、言わない約束を守るにおいて講義後重要度が下がった。

Fig1. 収集すべき情報における重要度評価平均値 ■ pre ■ post

Fig2. 伝達すべき情報における重要度評価平均値 ■ pre ■ post

虐待対応に関する項目：各項目の評定値について、事前/事後×項目の 2 要因 ANOVA を行ったところ、交互作用が有意であった($p < .01$)。録音は、講義後に肯定的な評定が上昇し、それ以外の 7 項目は、肯定的な評定が低下した。撤回したらなかったと考えるについては有意差は示されなかった。

Fig3. 虐待対応項目における肯定的評価平均値

考 察

収集すべき情報については、パパの意図や気持ちといった心情を聴く項目において、講演後に重要度評定が低下した。また、伝達すべき情報については、子どもにわからないと伝えることの重要度評定が上昇した。虐待対応に関する項目は、誘導や二次被害につながる可能性のある項目についての肯定的評定が講義を受けることで低下した。結果から、教育機関における子どもからの事実確認について、知見の提供方法やタイミング、それらの重要性について考察した。

引用文献 仲真紀子(2014) 司法面接で伝えるべき情報・収集すべき情報-司法面接の研修を受けることで何が変わるか-日本心理学会 78 回大会論文集